

「教育即生活」の背景に関する一考察

高 橋 信 進*

One consideration on the background about The Spirit of the Founding:
“ Education and Living ”

Nobuyuki TAKAHASHI*

Key words : 建学の精神	The Spirit of the Founding
教育即生活	Education and Living
新教育運動	the new movement of education
児童中心主義	child-centered education
生活教育	education for living

[1] はじめに

「教育に一生を捧げたい」。これは、教育に携わる者の多くが、心に刻む言葉である。しかし、「学園の母」と慕われた初代柴田学園理事長柴田やす先生ほど、身命を賭して自分の教育を創り、その実践に一生を捧げた教育者はいないのではないか。

昭和 25 年 5 月 14 日、念願かなって国より設置許可を得た「東北女子短期大学」の開学式の日、柴田やす先生は寮生と同じ納豆の軽い朝食をとった後式典に臨んだ。喜びと感謝が詰まった式辞を読み上げていたその途中、先生は壇上で“花が散るように”倒れ、急逝された。

柴田やす先生の次女で後に第三代柴田学園理事長となる今村 敏先生は、「柴田やす女史追悼録」（昭和 27 年発行）に次のように記している。

「その日は奇しくも『母の日』でした。朝は赤いカーネーションを捧げ、昼には白いカーネーションに変えねばならなかったのです。

母が『実に過去 28 年間は、私にとって苦闘と共に感謝の歴史でした。』と読み上げた時、一瞬言葉が切れました。恐らく感極まって、心で泣いている母の

心境が、私にはよく分かりました。その後また読み続けた声には、殆ど何の乱れも感じられず落ち着いたものでしたが、もう一度声が途切れたと思う瞬間、静かに静かに大きなテーブルの陰に姿をかくしてしまっただけです。」

追悼録には、その後の式典の状況が詳しく書かれている。柴田やす先生は、手早く講堂横手にある学長住宅に運び込まれた。今村敏先生の指示で、式辞は斎藤馨教授が続けて読み上げること、祝宴終了まで母の危篤を厳秘とすることが決められた。

「柴田学園万歳、東北女子短期大学万歳」。その華やかな歓声が窓を越えて病室に達した時、冷たくなった額をなでながら、敏先生は泣き崩れた。

柴田やす先生の臨終の懐中には、学生に対する無言の遺言が残されていた。

「 大学をたてしるしに をとめどち
はげみ学びて つくせ世の為め 」

この辞世の句は、先生自らの声で朗誦されることはなかったが、かえって深い感動を与えることとなった。このことを聞いた学生たちは、声をあげて泣いた。

柴田やす先生が倒れられる直前、式辞において建学の精神「教育即生活」が学生に語られている。

柴田やす先生は大正12年に「弘前和洋裁縫学校」を設立した時から一貫してこの建学の精神を教育方針として示し、生徒学生が身に付けるべき思想として多くの挨拶や式辞等で語っている。

建学の精神は、柴田やす先生の中でどのようにして生まれ、育まれてきたのか。先生は我々に何を伝えようとしたのか。様々な資料を読み原点に立ち返って、その意味と背景を探った。

本稿は、第二代東北女子短期大学長松野傳先生の「柴田やす女史の建学の精神について」(「柴田やす女史追悼録」)から、多くの示唆をいただいた。また、資料の引用に当たって、旧漢字は常用漢字に変換するなど生徒学生に分かりやすく表記した。

[2] 建学の精神の意味

1 「開学ノ動機」

柴田やす先生が、建学の精神として「教育即生活」を最初に主張したのは、大正12年の「弘前和洋裁縫学校」設立時である(1年後に、「弘前和洋裁縫女学校」に改称)。文部省に提出した申請書「開学ノ動機」には次のように書かれている。

「知識に偏った教育の弊害は、高い理想にとらわれ過ぎ、人生の意義を考えられず思い悩み、遂に一生を誤った方向に進む者が増えていることにある。このような人間を救うためには、職業教育しかないと考え本校を設立した。(中略)

そこで、『教育即生活』を目標に掲げ、知識に偏らない教育を行うこととした。(中略)

女性が本来持つ『柔和の心』を内に秘めながらも、高い教養をもった賢い女性を養成することにより、国の恩に報いたいと考える。」

2 創立20周年記念式辞

昭和18年、創立20周年記念式典が行われた。その式辞の中で、柴田やす先生は建学の精神を主

張した社会的背景や教育観を具体的に述べている。

「大正12年の本校設立当時、学問文化は進展し、国民の多くが教育に浴することができる時代でした。しかし、その任に当たる教育機関が十分に社会の要望に沿うことができませんでした。特に女子の使命である家政教育については、一層その感を深くしました。当時は、家事裁縫は軽視され勤労を卑しいものとし、知的方面のみ重要視された時代でした。

しかし、女子にはどうしてもその实际生活に即した実技と勤労が必要でありますので、私はここに『教育即生活』の目標を定めたのです。」

3 生活を中心にした教育

昭和21年、柴田やす先生は「東北女子専門学校」を設立した。その開校式の式辞で、建学の精神を「生活即教育」と表現し、科学を基礎としない生活、生活に対する洞察力を欠いた教育は存在し得ないと、生活を中心とした思想を展開している。

「この二十数年間、私が教育信条としてきたのは『生活即教育』ということです。生活を離れた教育はなく、教育を抜きにした生活は考えられないと信じます。同時に学問文化は20世紀初頭からその進展を早め、科学を基礎としない生活、生活に対する洞察力を欠いた教育は到底存在し得なくなってきました。

『生活即教育』の目標を到達するためには、学問文化に対する深い理解力と高い教養が必要です。これが、女子専門学校を創設しようと考えた動機です。」

4 学生への最後の教え

昭和25年、柴田やす先生は東北女子短期大学開学式において急逝されたのであるが、その直前、式辞の中で建学の精神について語っている。

この内容は、次の3項目に要約できる。

- ①学問と生活の一致を通して、自主的な科学研究に努めること

- ②学理探究の道を重んじること
- ③学識教養の高い指導的女性をめざすこと

これが、学生に対する最後の教えとなった。

「今日ほど教育、特に女子教育の重要さを感じさせる時はないと思います。婦人の地位や身分は保障されています。

しかし、婦人の教養が正しく高まり、その力が内面的に確立したものでなければ、真に婦人の地位が向上したとは言えないのです。」

「本学は学園の伝統を継承し、被服科中心の家政学に関する学術技能を攻究してまいりました。さらに、実際的な応用力を養い、わが学園の主張である『教育即生活』をモットーに、学問と生活の一致を通して自主的な科学研究の意欲を助成し、併せて学理探究の道を進め、以て学識教養共に高い社会の形成者としての指導的女性を育成しようとしています。」

5 「創刊のこぼし」

柴田やす先生が、生徒に語りかけるように語った文章が残されている。昭和22年「柴田中学校」が創設され、その交友会誌「あけぼの（創刊号）」（昭和24年）に、「創刊のこぼし」を贈っている。

丁度日本が敗戦から立ち上がり、新国家の建設途中であり、また柴田やす先生が倒れられる1年前のことであった。

「国破れて山河あり」の杜甫の詩を引用しながら、不断の努力により文化的平和国家を再建しようと呼びかけた後、次のように述べている。

「たとえ本紙の紙面は狭くとも、記事の内容が充分なものでなくても、本校生徒の純真にして偽りのないありのままの生活感情を表現したものであれば、充分なものと思えます。」

「27年前、和洋裁縫学校の設立当初から本学園の教育方針として、『生活即教育』を一貫して掲げてきました。（中略）こんこんとして尽きざる素晴らしい文化の発展力も、その源泉は日々の実生活に即した不撓不屈の精神と不断の努力以外には何ものもないので

す。」

[3] 建学の精神の底流に在るもの

1 批判的にみる教育観

建学の精神の底流に、ものを批判的に見る教育観があるのではないかと考える。これは、社会情勢を冷静に見つめ、安易に迎合することなく思慮し、決断をした場合は自らの主張を明確にして行動する、という教えにつながる。

もともと、「教育即生活」の根底には、生活教育を重視する思想がある。生活教育は、現実の生活から遊離した内容を学習者の生活体験と無関係に教える『旧教育』を批判し、学習者が自らの生活を通して学ぶことを教育の基本とする『新教育』の立場をとる。知的な労働を重んずる柴田やす先生は、この思想を、実践する教育の基盤に据えた。

創立20周年記念式辞（〔2〕2の項）で述べた社会認識は、当時の教育が果たすべき課題をいくつか捉えていたし、実際、柴田やす先生はその課題解決のための施策を実施している。例えば、家庭科教員の不足に対しては直ちに師範科を設置し（昭和8年）教員養成に取り組むと同時に、社会の要請に応えるように邦文タイプライターの技術者養成のためタイプライター科を設置した（昭和13年）。

この意味で、柴田やす先生は社会情勢を冷静に見ながら、時代を先取りする実践教育者であった。

第五代柴田学園理事長 今村城太郎先生は、創立70周年記念誌・巻頭言（平成5年）で、批判的に見ることの重要性について次のように述べ、指導する者の責務を説いている。

「現在社会が抱えるいじめ等の深刻な課題は、社会の逃避的態度と教育現場にある無責任な指導に原因があると思われる。創立70周年を迎えるに当たり、改めて問われるのは、本学園がささやかではあるが、こうした状況に対し一貫して批判的姿勢を貫いてきた事実である。

身の回りの事実を凝視し、一歩でも半歩でも教える子たちの真の必要に応えようとするのは容易なことではないが、殉教的熱意をもって実践しなければならない。」

2 「教育即生活」と「生活即教育」

「教育即生活」と「生活即教育」の差異は何であろうか。柴田やす先生は、大正12年の弘前和洋裁縫学校開校以来、「教育即生活」を目標として掲げてきた。しかし、昭和21年の「東北女子専門学校」の開校式式辞では、「生活即教育」と表現し、生活教育の観点から、生活を重視した教育を説いている。

また、昭和24年の「あけぼの（創刊号）」の中でも「生活即教育」と表現し、中学校生徒に対し建学の精神を説いている。

これらのことから、柴田やす先生が「生活即教育」に言及するのは、次の二つの場合に見られる。

- ① 指導者を対象に、生活教育に主眼を置いて、思想を語る場合である。そこでは、学習者が自ら生活し、行動することによって得た経験を基に教育を行うことの重要性を強調している。
- ② 生徒学生の分かりやすさに留意して、語りかける場合である。そこでは、日々の実生活を大切にし、その充実のために学んだ教育を生かすよう説いている。

生活と教育の関係について、松野傳先生は追悼録の中で、次のように分析し記している。

「元来、女史は教育学者ではなく一実践教育家であった。従って、日頃建学の精神などという厳めしいものを体系づけた筈もないが、ただ後進の私どもは女史の身をもって示された実践の跡を顧み、その言行から演繹あるいは帰納してその精神を把握し、永くこれを一つの手本として生かしたいと願っている。」
 「女史は、これまでの偉大な生活教育者と同様の教育哲学を体験された。その意味で、生活のあるところ教育があるという真の生活教育からスタートを切った教育者である。だからこそ、観念論的教育が支配的であった時代にあっても、敢然と『生活即教育』という遠見を主張できたのである。」

「教育即生活」と「生活即教育」の概念について、筆者が考える一試案として、演繹的思考と帰納的思考の関係から構造化したものを図1に示した。

具体的な活動は、次のように説明される。

- ① 日々の実際的生活活動から、一般化した原理を抽出する。
- ② 次に、原理を分析・整理・活用して、実効性ある質の高い生活活動を生み出し、実践する。

3 比類なき努力

柴田やす先生の活動において、短期間で特に努

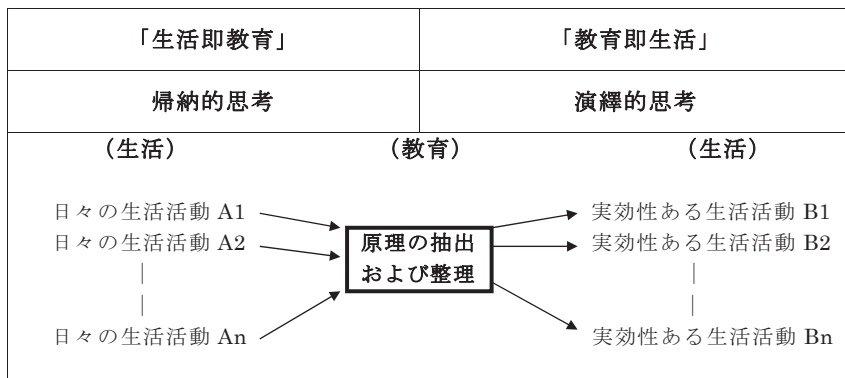


図1 「生活即教育」と「教育即生活」の概念図

力を傾注し取り組んだ次の二つのことが注目される。

1) 自立への道

明治39年、柴田やす先生は女性としての自立の道を求め、秋山夫妻（妻は異父妹白鳥みきさん）と共に上京した。教師になることを決断し、東京にいた3年1ヵ月の間、寸暇を惜しんで勉学に努め、資格を取得し、就職まで到達した。この必死の努力の陰には、郷里に残してきた2人の子どもの（長女の梅さんは6歳、次女の敏さんは4歳）のことが、常に脳裏にあったと思われる。やす先生には将来子どもを引き取り、東京で安定した生活をしたという希望があった。

この間に取り組んだ活動は、次のことであった。

- ①東京府家事科教員伝習所に入学、卒業する
- ②築地外国語学校で洋裁を習う
- ③東京実業女学校技芸部に入学する
- ④東京府小学校裁縫科正教員の資格を取得する
- ⑤東京府板橋町志村小学校訓導となる

当時、やす先生が若い人達に混じって猛勉強する姿をそばで見ていた鎌田彦一先生（日本大学第三学園理事長）は、「自分より8、9才も年下の妹達と一緒に大晩学された。そこに先生の崇高な建学の精神が芽生えていったのではないか。」と記している。

2) 学園施設の拡充

柴田やす先生は大正12年の和洋裁縫学校の発足から、昭和18年の創立20周年記念式典までの20年間で、校舎の増改築・新築を19回も行い、施設の拡充を図った。さらに、昭和21年から25年の5年間で、自分の夢である最高学府大学の設置に向け、次のように学園の教育機能の拡大に取り組んだ。

- ①昭和21年；「東北女子専門学校」 設立認可
- ②昭和22年；「柴田中学校」 設立認可

- ③昭和23年；「柴田女子高等学校」 設立認可
- ④昭和24年；「東北栄養学校」 設立認可
- ⑤昭和25年；「東北女子短期大学」 設立認可

4 「済美」と「勤儉」

1) 「済美」の教え

柴田やす先生が大切にした言葉に、「済美」がある。「済美」とは、中国の「春秋左史伝」から引用された言葉で『美德をなすこと。子孫が先祖の業を受け継いで、よい行いをすること』という意味を持つ。昭和27年5月、新築なった柴田学園講堂の演壇の真上に「済美」の扁額が掲げられた。“先輩が残した立派な偉業を受け継ぎ、ますます発展させて欲しい”という柴田やす先生の願いが込められたものであった。

昭和35年、不慮の火災によりその講堂は焼失した。しかし、今村敏理事長の涙ぐましい努力により、昭和38年、鉄筋三階建の近代的な寮が建設された。「済美寮」と命名され、月足憲正教授の筆による門標が掲げられた。今村敏理事長が母の思いを継承するため、「済美」を寮名にしたものであった。



写真1 済美寮の門標

2) 「勤儉」の実践

柴田やす先生の日常生活は、簡素生活に徹したものであったと言われる。「赤手空拳」(せきしゆく

うけん：腕一本でことに向かい、成功する）と表現され、経済的には全くの零から学園建設に取り組んだのである。当時、弘前市立女子高等学校教頭 市田正治先生は、追悼録の中で次のように記している。

「学園葬の数日後、私はご遺族を住宅に訪問した。先生の住宅は学校と棟続きになった寄宿舎の階下で、教室を二つに仕切ったような14畳の部屋だった。それが先生の応接間兼居間兼食堂であった。卒業生8,000人を数える総合学園の学長住宅としては、極めて簡素なものであった。」

校訓の一つに「不断ノ心掛ヲ以テ 勤儉ナルベキコト」がある。“常日頃仕事に励み、無駄のない簡素な生活に努めること”という意味であるが、この「勤儉」は、生徒に対する教訓であるとともに、先生自らが実践した生活信条でもあった。

5 梅とニワウルシ

柴田やす先生にとって、梅とニワウルシは特別深い意味を持っていたと考えられる。

1) 梅花の香り

“梅の花は厳しい風雪に堪えて、香り高く咲く”と、柴田やす先生は自分の生き方と重ね合わせて、梅をこよなく愛した。大正12年、弘前和洋裁縫学校設立時に、柴田やす先生の考案で梅花を中心に据えた徽章が制定された。五十年史には、徽章の由来が次のように記録されている。

「雪輪」—清浄無垢な天真の純情を表す
 「8咫の鏡」—明和の徳を表す（注1）
 「梅花」—『梅経寒芳発清香』の句の意味に基き、刻苦精励して成功を期すことを表す（注2）
 「3線」—君国、師、父に奉仕すべき三道を表す
 これらを総括して、本校教養の大精神を表徴したものとす。

（注1）「やたのかがみ」3種の神器の1つ。直径2尺の

円鏡

（注2）『寒さに堪えた梅は、清らかで芳ばしい香りを発する。』

今村敏先生は、「柴田やす女史追悼録」の中で、梅を愛した母柴田やす先生に対する思い出を、校章の梅花に寄せて次のように記している。

「霜雪をしのいで芳しい香を漂わす高潔清浄な梅花は、云いしれない感慨をもって、私には眺められるのです。梅を愛した母の一生は、いかにも梅に似つかわしいものであったように思います。物欲も名利も母の素志を迷わす力はなく、艱難辛苦もその志を奪うことはできませんでした。（中略）

学園の校章の中に母の精神を感じ、母の理想を感じ、これからも母の信念を体し、更に一層の奮起を誓うものです。」

2) ニワウルシと共に

「やす先生は、十坪ばかりの前庭を清掃した。その時、三寸ほどに伸びた若芽を見つけた。この若芽と自分の境遇に妙な暗合を感じた。“お前は私と同じだ。一緒に伸びていこうね。あ、太陽の恵みあれ、大木になれ”。やす先生は箒でそっと土を寄せてやった。」（市田正治「謝恩の開学式」より）

大正9年6月、「柴田和洋裁縫学校」の開校式の朝のことであった。後にこの若芽は「ニワウルシ（別名神樹）」であることが分かった。やす先

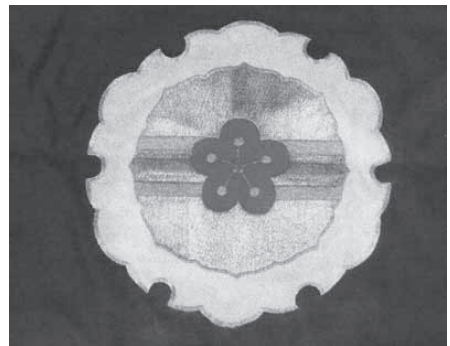


写真2 徽章（学園旗から）

生にとって、この若芽に水をやることが日課となった。ニワウルシは、約束を守るように大きく伸びていった。

前述した火災により、このニワウルシはいったん、灰燼に帰した。しかし、今村敏理事長は新しいニワウルシを植樹し、母の意志を継いだ。

柴田学園正門右手に高く立つこの木は、“学園のシンボル”として、現在も生徒学生に慈愛のまなざしを注いでくれている。

[4] 建学の精神を培ったもの

1 「台所と政治」

柴田やす先生は、生後9カ月で父親と死別、母親の愛を受けて育った。家庭の事情で14歳までの間に4回、生活の場を変えた。14歳の頃、安方の叔父の今村家で家事手伝いを兼ね養育されていたが、7、8キロ離れた荒川にいる母のところに歩いて会いに行ったという。しかし、やす先生はこの逆境に負けることなく、明るい利発な少女として育った。

市田正治先生は「柴田やす女史追悼録」の中で「柴田やす先生の強い精神力は、幼児期の逆境に処する間に、培われたものと思われる。」と記している。

柴田やす先生は、その母親から「台所と政治」について教えられたことを書いている。

「私は成長するにしたがって、母の愛は正しい愛で、決しておぼれる愛ではないと知りました。母は常に寛であるとともに、正しからざることに対しては、飽くまで厳でありました。

さらに深く感じたのは、その聡明さでした。当時から女子も政治を知らねばならないと言って、よく『台所と政治』を説かれました。主婦の領分である台所の経済生活と、一国の政治とを対比して、常にその在り方を考えねばならぬと教えられたことは、今となってその先見の明に驚くばかりです。女子も政治に関心を持ち、教養を高めねばならないという、深い教訓を残してくれました。」

2 「私の師」—公平な愛—

教師の人格は、教え子の中に生き続けると言われる。明治44年、柴田やす先生は青森の浦町尋常小学校に新任教師として勤務した。その時、担任した教え子の須藤ちよさん（79歳）が、東奥日報「私の師」の欄に、柴田やす先生の思い出を書いた貴重な記事が掲載されている。（昭和54年）

記事は、柴田やす先生を「貧しい子にも、公平に愛をそそぐ教師」として紹介している。

「柴田先生は、背が高くきれいな先生でした。先生は裁縫（和裁）が担当でした。当時は、先生方の目はほとんど裕福な家の子どもに向けられていました。学校での教え方にも“差別”があるのは、日常茶飯事でした。ところが柴田先生は、いつも公平な態度で、しかも温かく思いやりのある心で教えてくれました。

子ども心にも（当時8歳）『あゝ、いい先生だな』と感じ、その時の思いがしっかりと胸に刻まれています。』

3 三山先生の支え

柴田やす先生が学校設立の活動を開始するに当たって、陰に陽に先生の教育活動を支えてくれたのは、いわゆる「三山先生」たちであった。この3人は長い期間にわたって、先生の相談相手であるとともに、学園の教員として生徒の指導に当たった。

- ① 高山文堂 先生（書道、国語）
- ② 杉山壽之進先生（国語、数学）
- ③ 永山源之丞先生（歴史・地理、修身）

1) 自活の道への決断

大正3年、柴田やす先生は新たな自活の道を求めて、青森での教師の職を辞して弘前に移った。その時、やす先生が自分の将来について教えを仰いだのは、永山、杉山の両先生であった。

二人は当時、弘前高等女学校の教師をしていた。やす先生は、苦勞して身に付けた和洋裁縫・手芸の技術を生かして、学校の教師になることを希

望していた。しかし、二人の考えは反対であった。「いまさら、学校の教師になる必要はない。その技術を生かして、すぐに私塾を開いた方がよい」と助言した。私塾による独立自活を薦めたのは、やす先生の経歴と才能を見通して、新しいタイプの裁縫塾が開発できる人物と考えたからである。

やす先生は二人の話聞き入れ、婦人生活と家庭、家庭と家事裁縫を関連づけた新しい教育への取り組みを始めた。

2) 校訓の制定

昭和5年、「弘前和洋裁縫女学校」において校訓が制定された。永山先生作成の原案に、柴田校長や杉山、高山先生の意見を加え決定したものである。

「生活のあるところ教育あり、学習がある」という「生活即教育」の立場で、生活教育を進めてきた結果から導き出された結論が5カ条に凝縮された。

- 一、常ニ清浄ノ心ヲ養ウテ品性ノ向上ニ努ムベシ
- 一、人ニ対シテ和顔愛語事ニ処シテハ親切丁寧ナルベシ
- 一、所作ト言語トハ快活優雅ナルベシ
- 一、長幼序ヲ正シ上下礼ヲ乱サザルコト
- 一、不断ノ心掛ヲ以テ勤儉ナルベキコト

3) 三山先生を讃える

昭和8年、柴田やす先生は創立10周年記念式典において、三山先生の長年にわたる献身的な協力に対し、次のような和歌を贈って感謝を表している。

「三つ山の 高きしをりの あればこそ
十とせの坂も 今日登りけれ」

(三山先生の貴重な導きがあったからこそ、10年の困難な坂も登り、今に至ることができたのです)

4 生徒学生の理解

建学の精神について、生徒学生はこれをどのよ

うに理解し、実行しようと考えたのであろうか。これを知るための資料が「今村敏先生追悼録」に残されている。昭和46年度柴田学園卒業式における卒業生代表 大野弘子さんの答辞である。次年度からは女子大卒業生が答辞を行うことになったため、短大卒業生としては今村学長に対する最後の答辞となった。

「今この学舎を去るに当たって、いつまでも忘れられない幸せな思い出をただ一つ申し上げます。それは去る10月に行われた学園祭です。今年度初の試みであった学校・学友会共催の学園祭において、私たちは学園の指導理念である『生活即教育』の真の精神を体得することができました。(中略)

学園祭は『よろこび』というテーマのもと、全学全員の参加を得て、自立性と協力性が発揮され大成功に終わりました。そして、後夜祭を迎えたのです。午後9時ごろ、フォークダンスの終曲と共に3日間の全プログラムを終了、場内が消燈され、キャンドルデコレーションを囲む円陣から蛍の光の合唱が起こったとき、私たちの眼は涙に曇って、キャンドルの焰がかすんで見えました。すすり泣きの声が洩れました。あゝ、このまま卒業しても悔いはないと思いました。喜びの極まった涙、感動の涙は、私たちの団結と尊い汗によって得られた感動だったのです。

学長先生、『生活即教育』とは、机上の学問以外に日常生活そのものの中に、私たちの修養向上の材料はいくらでもあるという教えを、この素晴らしい体験を通して学びました。」

この答辞朗読中、今村学長は白い手袋の右手で、しばしば目頭をおさえた、と記されている。

「5」新教育運動の影響

1 新教育運動との融合

柴田やす先生が私塾を開いた大正初期(1910年代)、日本では新教育運動の大きな波が教育界に波及しつつあった。この運動は、ヨーロッパに端を発した児童中心主義を基盤とする新しい教育

観を、実践に生かすものであった。この波は、日本における生活教育の進展を促していった。

高い知識と確かな技術力を持った柴田やす先生は、弘前にある他の私塾とは異なったより総合的な教育の場を目指していた。寺子屋式の一室で、生徒と向き合いながらも、社会の情勢や教育界の動向を敏感に感じ取っていたと思われる。

自分の目指す教育理念と新教育運動との融合を考える中で、後の建学の精神に至る思想が芽生えていったのではないか。この思想は、大正12年弘前和洋裁縫学校の開校と同時に、「教育即生活」という形で、学校の目標として掲げられることになる。

2 欧米における児童中心主義

従来ヨーロッパの学校においては、事物より認識の構成を重視する観念論的思想及び知識注入主義に基づく、いわゆる「旧教育」が行われていた。

しかし、19世紀後半からルソー、ペスタロッチ、エレン・ケイらによる児童中心主義に基づく「新教育」が強調され、この思想を実践するために多くの実験学校が設立された。この思想は、『子どもの自主性や興味・関心を重視し、一人ひとりの個性を尊重する教育』を主張するものであった。

一方アメリカにおいては、児童中心主義はプラグマティズム（実用主義）と結びつき、ジョン・デューイらによって「進歩主義教育運動」として展開された。主な著作、主張等は次の通りである。

ア ルソー「エミール」(1762)

『消極教育』の原理を重視した。“全てのものは、造物主から出た時は善であるが、人間の手の中では悪になる”

また、『実物教育』を重視した。“知識を与える前に、その道具である感覚器官をしっかり育てよ”

イ ペスタロッチ「隠者の夕暮れ」(1780)

『労働による人格陶冶』を、根本理論とした。“子供達に無関係な事を頭で理解させる

のではなく、生活を通して学びを進める”と主張した。

ウ エレン・ケイ「児童の世紀」(1900)

20世紀を『児童の世紀』と捉えた。“子どもが持って生まれた本能、素質、個性は、無制限に開発されるべきである”

エ ジョン・デューイ「子どもと社会」(1899)

シカゴ大学に付設した実験学校で、『まず生活、そして生活を通じての学習』を原理として、生活と経験に基づくカリキュラムの下で、教育実践を行った。

3 日本における生活教育

明治38年、京都帝国大学教授 谷本富は、日本においても新教育運動を起こす必要がある、と著書「新教育講義」の中で訴えた。これは、日本の教育界に大きな影響を及ぼした。大正から昭和初期にかけて新教育運動は「大正自由教育運動」と呼ばれ、生活教育を中心に実践された。このため、教育を改革するという主張のもと、多くの学校が創設された。

- ① 成城小学校—澤柳政太郎
- ② 自由学園 —羽仁もと子
- ③ 玉川学園 —小原国芳 など多数

大正10年の夏、東京において「八大教育主張講演会」が開催され、2000人以上の聴衆が全国から集まった。玉川学園総長 小原国芳先生他8人の講演者が8日間にわたって、自らが実践した教育を語った。講演内容は「八大教育主張」として刊行されている。

この講演会の内容は、教育の新しい方向を模索していた柴田やす先生にも影響を与えたものと思われる。なお、講演者の一人である小原国芳総長は、昭和43年5月に行われた「柴田学園創立45周年記念事業」において、記念講演を行っている。

4 羽仁もと子先生「生活即教育」

羽仁もと子先生は八戸市出身で、千葉学園の創設者 千葉クラ先生の実姉である。大正10年(柴

田やす先生が和洋裁縫学校を作る2年前)、羽仁もと子先生は自由学園を創設し、生活中心主義を教育方針とした教育実践を行った。

羽仁もと子先生は著作「家庭教育論」の中で、「生活即教育」を採り上げている。家庭生活について「子どものための家庭教育は、ただその家庭生活である」と主張し、あるべき家庭生活を次の3つで表現している。

- ① 自覚的に生活環境を良いものにしてやるのが、即ち教育そのものです。自覚的であるとは、ただ与えられた環境に満足するのではなく、一つの理想の環境を目指して努力することです。
- ② 教育は親がするものではなく、子どもが自らを教育するように親が励ましてやるのが大切です。この場合、親は大きな方向だけを決めてやり、後は子ども自身の好みと工夫によって生活させるのです。
- ③ 子どもの長所を発見し、それを育てていくことが大切です。そのためには、まず親が自分の才能を磨き、それを多くの人のために役立つ姿勢を子どもに見せることです。

青森県教育長の岡本省一氏が、柴田やす先生について書いた東奥日報の記事「この人を推す」(昭和40年)の中で、「先生が『生活教育』という透徹した識見を主張し実践されたことに対し、自由学園の羽仁もと子先生、玉川学園の小原国芳先生も『東北に柴田先生あり』と言って共鳴された。」と紹介している。羽仁もと子先生と柴田やす先生の間には、何らかの交流があったものと推察される。

[6] おわりに

柴田やす先生は、自分の一生を「苦闘と共に感謝で満ちている」と表現した。劇的な最後で閉じられた先生のことは、多くの人に感動をもって語られている。松野傳先生は、「柴田やす先生は学園の永遠の母であり、変わらざる『生命の源泉』

である」と記された。

柴田女子高等学校において、柴田やす先生の一生を英語で書いた副読本が作成され、生徒の教材に使用されたことが、創立50年史に記録されている。

市田正治先生は、柴田やす先生の一生を伝記風にまとめあげ、雑誌「少女世界」に発表して全国の人々に深い感銘を与えた。その内容を、柴田女子高等学校教諭 杉沼忠三先生が英訳したものである。

この副読本「Mother of the Shibata Institution」は、昭和30年(1955)5月に弘前市で開かれた世界仏教大会において、杉沼先生によって世界に向けて発表されている。

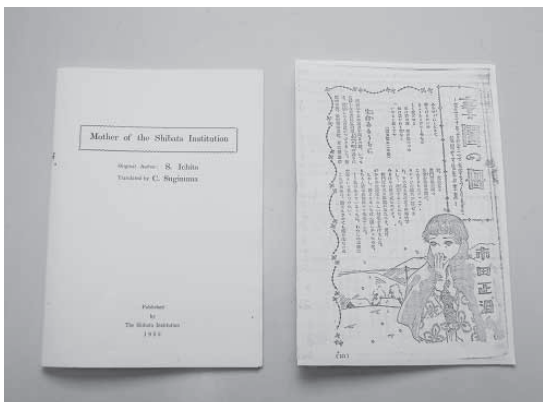


写真3 柴田高校で使用した英語の副読本と市田正治先生の作成した冊子「学園の母」

平成27年11月、弘前市の陸羯南会が主催する「陸羯南顕彰作文コンクール」において、弘前市立東目屋中学校1年 坂本遥さんの作文「柴田やす先生の生き方を指針に」が最優秀賞を獲得した。表彰式でこれを読み上げた坂本さんは、柴田やす先生の少女期の苦しく悲しい体験を紹介しながら「志はあきらめなければ、必ず開花する」と強調した。

母親は、東北女子短期大学の卒業生であった。現在もなお、柴田やす先生の力強く生きた一生が、若い人達に語り継がれていることに感動を覚えた。

この小論において、柴田やす先生が建学の精神を通して生徒学生に伝えようとした思想の一部に触れることができた、と考えている。同時に、先生の思想は深く、広く、全体像を正確に把握することは極めて困難であることも分かった。

しかし学園に在る我々には、今後もこの思想の根源にあるものを探求的な態度で探り、それを個々の実践の中で生かし、生徒学生に伝えていく責務があると思うのである。

このとき、松尾芭蕉が弟子の森川許六に書き送った次の訓えを、胸に留めおく必要がある。

「 故人の跡を求めず、
故人の求めしところを求めよ 」

(謝辞)

本稿の執筆に当たり、資料をご提供いただくと共にご指導いただいた東北女子大学教授 山崎祥子先生並びに東北女子短期大学教授 七戸英之先生に、心からの謝意を表します。

<参考文献・資料>

- 1 「ここに人ありき 柴田やす伝」 船水清著
- 2 「柴田やす女史追悼録」 柴田学園
- 3 「今村敏先生追悼録」 柴田学園
- 4 「五十の年輪」 柴田学園
- 5 「柴田学園六十年史」 柴田学園
- 6 「思い出をつづる―創立七十周年記念誌―」 柴田学園
- 7 「羽仁もと子著作集 (11) 一家庭教育編下―」 婦人之友社
- 8 「教育学事典 (4 巻)」 平凡社
- 9 「教育学大事典 (4 巻)」 第一法規出版
- 10 「新教育学大事典 (4 巻)」 第一法規出版
- 11 「あけぼの (創刊号)」 柴田中学校校友会
- 12 「私の師」(昭和 54 年 9 月) 東奥日報
- 13 「青森県を作った 50 人」(昭和 40 年 9 月) 東奥日報
- 14 「東北女専開校記念式」(昭和 21 年 7 月) 弘前タイムス
- 15 「世界名著 [デューイ]」 清水幾太郎著